

第 6 9 回 近畿地区大学建築系学科  
卒業設計コンクール応募作品一覧

平成27年4月9日  
日本建築学会近畿支部

No.	作 品 名	学生氏名	大 学・学 科	図面 枚数
1	Ethnosの風景 ー増田友也設計山内浄水場のたたみ計画	木村 明稔	兵庫県立大学 環境人間学科	9
2	芹橋回湯風呂	石橋 優子	滋賀県立大学 生活デザイン学科	6
③	<u>幽玄を纏う川湊 ー岐阜県川原町における 町を巻き込んだ鶴飼ミュージアムの提案ー</u>	熊崎 悠紀	関西大学 建築学科	8
4	有機的建築によるミュージアム&レジデンス	桐畑 有希	京都女子大学 生活造形学科	8
5	まちを縫う	久保 晶子	大阪市立大学 建築学科	1
6	もがりの森 ー現代の葬儀のあり方の考察ー	西村 和	武庫川女子大学 生活環境学科	3
7	「海境より」	崔 秋韵	神戸大学 建築学科 (都市デザイン)	7
8	「僕等への贈り物」	藤井 一弥	大阪大学 地球総合工学科	6
9	小さな町の大きな煙突	原田 翔平	大阪工業大学 建築学科	8
⑩	<u>道行きの闇 (みちゆきのかどもり)</u>	杉森 大起	立命館大学 建築都市デザイン学科	9
11	「伊根の海辺を歩く駅ー伊根町と連携する 観光休憩施設道の駅の設計提案ー」	片山 裕輔	帝塚山大学 居住空間デザイン学科	2
12	蹴上における時代を縁取る疏水美術館の計画	中原みまえ	京都府立大学 環境デザイン学科	10
13	Architourism of Nara	長谷川みのり	大阪工業大学 空間デザイン学科	7
14	まちの家。	奥 健太郎	摂南大学 建築学科	7
15	淵を編む	二石菜々子	奈良女子大学 住環境学科	9
16	ウチからソトへ ー单身者が集まって暮らす、 もう一つの在り方ー	峯崎 瞳	大阪市立大学 居住環境学科	9
⑰	<u>「運河と共に ー産業遺産と都市ー」</u>	斧原 慶子	京都工芸繊維大学 造形工学科	16
18	かける×カケル 結びつなぐ架け橋	尾崎 綾	武庫川女子大学 建築学科	8
19	祝祭の杜	森下 孝平	神戸大学 建築学科 (建築デザイン)	6
20	古墳空間	椛島 充智	和歌山大学 環境システム学科	8

(受付順) 以上20点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部  
平成26年度近畿地区大学建築系学科  
卒業設計コンクール（第69回）審査報告

審査員長 岡本 隆

平成27年4月9日（木） 審査会場・大阪科学技術センター（B1階101号室）

審査員長（互選） 岡本 隆  
審査員 浅野 博光・伊藤 泰・内海 慎介・北村 潤・三好 裕司・三好 陽介  
(50音順)

応募作品 20点（別紙参照）

### 審査経緯

ふだんは実際に建築されるものを設計として見続けている者にとって、いまだ設計者となっていない若者たちが作った「作品」を見るとするのは、戸惑いもありまた楽しみもある。

審査は7人の審査員によって行われた。

まず各委員が20の作品すべてについて見比べたうえで一人6票の持ち票で一次投票を行った。最初に満票近い票を得たものもあったが、その他は比較的票が割れたものとなった。得票があった18作品について一つ一つテーブルに置き、審査員相互でその作品の長所・短所を議論して理解を深め、投票によって最終候補作品を8作品に絞り込んだ。そのうえでこれらの作品を見比べながら再度投票を行い、相互の評価を確認しながらさらに議論を深めた結果、最終的な3作品は審査員全員の合意のもとに選定された。

入選各作品については選評に譲ることとし、過程の議論に触れておく。議論の中では全体的な傾向として設計としての錬度の低さが指摘された。分析・調査・プログラミングに重きを置く一方で最後の建築設計としての内容が十分に達成されていない作品が多くみられる。実務に携わる者としては、言葉だけでなくそれを実在物として練り上げるという建築設計者の本来の能力をもっと鍛え上げる建築教育であってほしい。卒業設計として選ばれるものにはしっかりした設計力への期待を持ちたいという思いが語られた。

選に入らなかった中でいくつかの作品が議論を呼んだ。「僕らへの贈り物」は美しいプレゼンテーションと印象的なストーリー性で最後まで狙上にあっただが、表現性の割には建築計画としての詰め弱さ感じられて入選に至らなかった。「まちを縫う」は地域の環境・歴史をうまく昇華しようとしている着想が面白く、建築計画として実際性もあり大変興味深い作品であったが、成果品が1枚のシートというのは資料が不十分であった。「Architourism of Nara」は議論を呼んだ。奈良の街の実状を理解し・活かしながら発展させていこうという姿勢は好感が持てるし、作品を折りたたんで本にしてしまうという着想のユニークさ、色使い、ページ構成などグラフィックデザインとしての完成度の高さも秀逸であったが、設計内容については不明確であった。卒業設計コンクールで入選となるためには、高い設計の質が求められるべきだという意見と、一方、建築学科の多様性が進む中で、狭い意味での「設計」だけに枠を限るべきではないという意見と二つの議論が大いにたたかわされたが、最終的には多様性を認めるとしても、入選とするには内容について今一步の達成が必要という意見で論が閉じられた。

今後、建築教育が多様化していく中で、卒業設計コンクールのなかで設計とは何かの意味づけがさらに問われることになるだろう。

(岡本)

## 審査概評

全体を見た印象として、学生らしい自由な創造力でコンセプトワークやダイヤグラムなど巧みな表現が多く作品で見られた一方、構造体のイメージや寸法線もない図面表現がほとんどであった。そんな中、派手さはないものの図面表現として丁寧に描かれた作品に対して、逆に目が留まり新鮮味と好感を持ったことは皮肉なことなのかもしれない。

審査にあたっては、応募 20 作品について各審査員が 6 作品を選ぶ投票に加え、全作品を講評する一次審査を行い 9 作品に絞り込んだ。この時点で満票を得た「道行の闇（みちゆきのかどもり）」は迫力あるドローイングを用いた圧倒的な表現力において高い評価を得て、入選作品としてまず選出されたかたちとなった。残り 8 作品については二次審査での再投票の結果「運河と共に - 産業遺産と都市 - 」と「幽玄を纏う川湊 - 岐阜県川原町における町を巻き込んだ鶴飼ミュージアムの提案 - 」の 2 作品が選出された。

選ばれた 3 作品はいずれもテーマの着眼点や建築デザインへの変換、地域やまちとの関係性、表現力において質の高さを感じさせる卒業設計にふさわしい力作であった。惜しくも選に漏れた作品の中でも魅力的なアイデアやセンスを感じさせる質の高いプレゼンテーションやなど目を引く作品が数点見受けられ、審査員の間で意見が分かれる場面もあった。

(三好裕司)

## 幽玄を纏う川湊 - 岐阜県川原町における町を巻き込んだ鶴飼ミュージアムの提案 -

熊崎 悠紀君 (関西大学)

私の評価尺度を簡潔に述べると ①企画への共感 ②場所の設定と計画の調和 ③造形性 (内外空間の魅力) ということになるだろうと思う。そして、これらを満たしたうえで、それらを統合して、美しく明快にプレゼンテーションする表現力が最もモノをいう。

この作品は、これらすべてに込めている秀作で、特に迫力のあるパースが 1 枚の絵として、見る者に一瞬にして提案の全貌を伝えている。

地形に融合する、ランドスケープ化したボリュームの配置、場所の特徴を生かして斜面で構成された断面や、

周辺の屈曲する道のパターンを導入したプランが変化あるシーケンスを生み出しており、魅力的な空間が秀逸で、多くの共感を獲得した。 些末ではあるが、屋根上の人々の落下防止手摺についても考慮が必要であった。

(内海)

## 道行きを闇（みちゆきのかどもり）

杉森 大起君 (立命館大学)

精霊流しがうっすらと浮かぶ黒い表紙を開くと、川と森と参道の物語が始まる。舞台は静岡県浜松市天竜区二俣町、林業を核とした宿場街の復興提案である。

秋葉神社に向かって真っすぐ伸びる参道を設定し、ゆるやかに蛇行する二俣川と国道に沿って街並みを創出している。国道に対して道の駅、川に対して製材工場、参道に対して宿泊施設などを配し、3本の軸線にふさわしい機能設定となっている。建物形態はシンプルだが、リズムカルに変化がつけられ、鳥瞰、アイレベルに対し、ともに魅力的なデザインになっている。

特に、角材を乾燥する際の積み上げ方を工夫することで、空間を生み出すアイデアはおも

しらく、木の香り溢れる気持ちのいい空間提案となっている。

提案内容は全般に心配りが行き届き、仕口などの詳細からエネルギー問題までカバーしていて、ぬかりがない。

模型写真、配置図、断面図、パース、挿絵などすべての表現がわかりやすく、見ごたえのあるプレゼンテーションになっており、人と森の息づかいすら感じられる情緒あふれる表現は芸術性も高く、選考委員満票の堂々たる入選である。

卒業後さらに研鑽を積まれ、豊かな才能を伸ばされんことをおおいに期待します。

(浅野)

「運河と共に ー産業遺産と都市ー」

斧原 慶子君 (京都工芸繊維大学)

尼崎工業地帯に残された運河岸の未利用地を地域コミュニティの場として再生しようとするプロジェクトと一言で言えばそうなるが、想定敷地を舞台とした「ものがたり」として読むこともできる。まず場所の分析がなされ、敷地を舞台にするためのプログラムが示される。様々な操作によって舞台を分節し、舞台のゾーニングが明らかになってくる。ここでは未だ用意されているであろう機能は明らかにされない。次の場面で、ゾーニングされた個々の場所での登場人物の行為に応じて措定された空間が一举に関係付けられてプロジェクトの全貌が見えてくる。運河が屈曲する特異点をリニアなチューブ状の空間がつくる立体的な曲線をつなぐ構成は、地域に拡がっていく道＝システムを作り上げる。自然とのふれあいの仕方、アクティビティを核とした場所づくりなど個々の提案は、与えられた機能条件に従って計画するのではなく、作られた場所に新しい機能を挿入していく手法とも言える。都市計画はまずインフラ整備を行い土地の区画が整備され区画の中に施設が作られていく。そのようなプロセスに対し、この「ものがたり」は小さな部分が増殖して自然発生的にまちが生成されるさまを描いた一篇の「ファンタジー」として評価したい。

(北村)